

ツバメは、部屋の中に入りました。そのわか者は両手の中に顔をうずめるようにしておりましたので、鳥の羽ばたきは聞こえませんでした。そしてわか者が顔を上げると、そこには美しいサファイアが、かれたスミレの上に乗っていたのです。「わたくしも世の中にみとめられ始めたんだ」わか者は大声を出しました。「これはだれか、ねつれつなファンからのものだな。これで、しばいが完成できるぞ」わか者はとても幸福そうでした。次の日ツバメは、はとばへ行きました。大きな船のマストの上にとまり、水夫たちが大きな箱を船からロープで引きずり出すのを見ました。箱が一つ出るたびに「よいこらせ」と水夫たちはさげびました。「ぼくはエジプトに行くんだよ」とツバメも大声を出しましたが、だれも気にしませんでした。月が出るとツバメは幸福の王子のところにもどりました。「お

いとまごいにやってきました」ツバメは声をあげました。「ツバメさん、ツバメさん、小さなツバメさん」と王子は言いました。「もう一ばんとまってくれませんか」「もう冬です」ツバメは答えました。「冷たい雪がまもなくここにもふるでしょう。エジプトでは太陽の光が緑のシュロの木に温かく注ぎ、ワニ